重修真書太閤記

五編 十

大
49
50

へ13
459
50

へ13 特
門
號 459
卷 50

消印 福

重修真書太閤記五編卷之廿八

羽柴秀吉鳥取の城を圍む事 并鳥取城中困窮の事

天正九年六月廿五日羽柴筑前守中國退治として播州姫路を首途を相從ふ侍い播州作州備前但馬の國人都合三万餘騎織田殿ゟ加勢の兵士一万餘騎總勢四万餘人と六万餘騎と沙汰し隊伍整々として天地を轟かせ因州へと進發し但州出石ゟ著城あらして國中の仕置を紀し七月五日因州ゟ著し鳥取丸山の両城をくるゝと追取卷て

同攻會印

攻うゝる秀吉の本陣い摩尼帝釈山あり諸勢とわけゝ持口と定む南い黄毋衣衆北い白毋衣衆西の方袋川と千塁川の間ゟ中村孫平次一氏山名大蔵大輔豊國蜂須賀彦右衛門尉正勝小寺官兵衛尉孝高加藤作内光泰木村隼人佑木下備中守荒木平太夫神子田半左衛門尉等陣をとる東表い織田殿の援兵一万餘騎鳥取と丸山の中間ゟ有る雁金山ゟい織田於萬宮部善祥坊宇喜多の加勢明石飛驒守長船紀伊守福田五郎左衛門楢崎監物宇喜多七郎兵衛岡越前守以下八千餘騎相い〻〻陣を取又毛利ゟう後詰の來う〻時押ゟへ〻とて秋里村

ゟ一城を築き枚原七郎左衛門尉ゟ一万餘騎を差副て渡口を守をゝるまゝ灘の邊ゟい浅野彌兵衛尉并ゟ丹後田邊の警固船の大将松井佐渡守康之等四五百艘うけ並へたる舟印沖津塩合の浦風ゟ吹なひうゝてそゝり丸山の東口ゟい羽柴小市郎秀長来山修理増屋隠岐守添田の某但馬の山名右衛門佑北の方ゟい垣屋駿河守礒邊泰亀井武田簑部以下錐を立るの地もなゝ屯をゝ陣々の芝土堤高ゝ築き柵二重三重ゟ結を隍廣き四五間をゝうにゝゝせ塀丈夫ゟ付矢窓重ゝ切夜ハ一間二間の間ゟ挑燈をうけ置たゝ用心堅固ゟゝて警衛嚴

重なるといへども空翔鳥もたやすくは舞うこと能はず城中の兵士誠に網裏の鱗圏の中の獸に似て道を出へき路もなく秀吉本陣の塀とい夜々白紙にて張たれば遠目にも白堊付たるに異ならず又京都より亂舞の堪能者多く呼下し日々夜々鼓うたせ融々陶々とめてなをうあるとい長陣に退屈させまじき為の謀ありうして秀吉毎日二度宛の乘物にて諸陣を廻りて勇氣をとゝめけるの深き思慮なるべし同様なる乘物を二川二三十間隔てゝ舁をたるとい何とも秀吉にて何とも供奉の乘物といふことを見分得ずとあらんとのや城中にてもいとゝ只寄手の陣々を見

りうして徒に日をくらしたることを術なうあるれ軍のあれうと足輕を出し寄手を呼引しのとも筑前守の軍令嚴密にして一人も取あふものなく只折々鉄炮打出しのこなれも城兵もまた漫に近川うゝ城と寄手の陣の間に俵川と云川あるて渡瀬ふうけれもとくう得と爰に吉川式部少輔經家森下入道中村對馬守を呼近つけ評定あるけるい斯て空しく日を暮さんうい一夜討して頃日の眠をさまさんやと申けるい森下入道中村對馬守羽柴の陣中堅固にして勿々間を得ず却て變を招の基なるべし只三家の衆の後詰をまつく内外ひと

〳〵責いたんと十全の策なるべく存じと申けるを此頃見怖を敵陣のうちさふ何とも可然と一同〳〵けるふるう經家も止を得をあさら夜討の評定を止めけり

小瀬甫庵本ふ天正九年六月廿五日筑前守姫路を立て因州ふ至る過る処在々所々放火をしめ取鳥の城下ふ至る廿六日の夜軍評定しをまり遠巻ふあ〳〵廿余町を隔て〳〵新城を構へ高山を本陣ふ定め手賦法制ふをさに沙汰し廿八日の朝ふう取巻三重四重ふ及へり附城の普請い七月朔日ふう鍬初ありて十日頃ふもくや堀櫓二階

門堀不日ふ出來さう湊川ふも舟橋を掛乱杭をふう四方ふ堀をわり鹿垣を結廻し十町〳〵ふ三階の櫓を立騎馬の武士廿人射手百人鉄炮百挺をしめ置五町〳〵ふ番所を作り番士五六十人を入替〳〵夜番廻番蟻の熊野參うをる如く透間もなく本陣の鐘時を告とい大将の陣の太鼓櫓々の小太鼓一度ふ打立てうまひをし築地の内ふハ十町をめり町屋を立因伯の商人軍市を立さう又城中ふはうのをあれも十日廿日の糧のをふして程なく餓ふのをめうと見や

藝州まても筑前守の取鳥を圍攻る由聞えしうを

吉川駿河守元春後詰のゝめ出馬をとゝやとおめへ
とも伯州の南條小鴨ちさうゑ勇氣をふるひ國中
を濫妨あゝけるふゝの是をも打棄あゝへさるあ
らゝ如何せんと謀と廻らしけるうちゝ日数うつ
うゝゝ取鳥まて何わとう心苦敷おもふらめ去
とも城の要害よけしい容易攻おとさるへきよあ
らゝ但兵粮おそ少うるへきゆゑ如何ようゝて兵糧
を運ひいれさきんと船手輩へ下知しけしい毛利
勢の船手の中ゝう新見左衛門尉有地右近うけゝ
ちう頓て大﨑といふ処へ打寄て両三日様躰を窺
ひゝうとも爰い敵の陣を去ちとちうゝ世町ゝ

ゝい両陣の間隠ろうゝへき隈もなゝ向城の用心よ
けれい有地新見の両人力とゝゝて引返を然い雲
伯の船手ゝのう入させちやとして鹿足民部少輔を奉
行とゝて軍艦十餘艘ゝ穀船五艘を弓纏て湊川近
く漕寄夜半ゝ舟を入んとせゝゝ長岡藤孝の警固
船ゝ松井佐渡守康之を大将として加悦勘十郎以
下敵船へ乗挑けるゝ楽原才助やつ先ゝ立て炬火
を抛入〳〵敵船を焼立攻めゝる松井一番ゝ鹿足
う船へ乗移ゝい鹿足めかゝゝ海中へ飛入たゝ松
井う郎等村尾四方助小舟ゝて追掛同〳〵海中へ
飛入遂ゝ鹿足を捕へて頸をとゝく松井村尾を具ー

て秀吉の本陣へ参上しけるとい着しるひし羽織を脱て村尾に賜る斯てのち城中糧いふく乏しく籠る處の百姓町人等饑腸の鳴を休めんと城の尾崎へ出て菓ふとを拾ひけるを秀吉の本陣ありけふ早うとの若ものの共掛合せ此菓拾ひに出しものと小々討取けるい城兵安うらひおめひ因幡侍の尾崎某伏をくきて羽柴方を討取て引返しをこしい色を直しけれとも城中兵糧絶けるい士卒い三度と二度とふし一度分を雑人に與へたるとして日夜に後詰の來らんことの待居けり寄手の陣に筑前守い加藤清正蜂須賀家政両人をよひて城中

定て兵糧盡困窮ふるへし但敵兵うち出るとあり共取合ふを窺ひ來るへし但敵兵うち出るとあり共取合ふことふうとと掟られ即從十人許まて搦手へ廻りけるを城中のの見知て經家よりくと告けれい經家五百騎こうを伏て両人をとりつ両人い城の体をとるく見濟し引帰さんとふを処へ伏兵起り一人も餘しとひしめさけるを清正大木の蔭よりくと半弓を以て廿餘人を射殪しけるに即等ありける木村又藏井上太九即森本義大夫いつもとく働き蜂須賀小六手自二人を打取猶も切立て立進みけるに經家り兵い此日頃糧に飢つる疲ありて搦手の峯にのわり様子を窺ひ來るへし但敵兵うち出るとあり共取合ふことふうとと掟られ即從十人許まて搦手へ廻りけるを城中のの見知て經家よりくと告けれい經家五百騎こうを伏て両人をとりつ両人い城の体をとるく見濟し引帰さんとふを処へ伏兵起り一人も餘しとひしめさけるを清正大木の蔭よりくと半弓を以て廿餘人を射殪しけるに即等ありける木村又藏井上太九即森本義大夫いつもとく働き蜂須賀小六手自二人を打取猶も切立て立進みけるに經家り兵い此日頃糧に飢つる疲ありて

あのよりとも戰くれと清正家政両人い打取首と
も提りくして實檢よ入城中の容子くちくく演說
あくかち秀吉ちれちそ小付の高名あくと殊の
外よ感賞あくしと也

經家森下入道中村對馬守自害の事
并鳥取落城因幡國中平均の事

斯て城中兵糧盡こて十月中旬よ及てい草木の葉
を食盡し牛馬と殺くちれと喰ひ後ちい將士秘
藏の名馬のこ殘し乘替ますも喰ひ盡し果ちい人
の馬と盜こ喰ひける間ぬとまれくと油斷ちく昼
夜用心ちくたりける雜人原い柵の外へくせ出草

木の根と堀取のちい敵の目の前ともいちく落る
菓と拾ちんと近寄い情なく寄手い鉄炮あてちれ
と討たとく味方い死骸と引こく切分てちれと喰
ひあるひい手負ていまく死ちそぬとも是い深手
なく助ちるへきよちあくく苦痛とさせんよう早く
死くしとて無体よ切殺し節々とちふくしてその腦
と食ひ中よも佳味い首よあるへくしとて凶と碎き
てあくそひ喰ふ有様鼠とふちくくちれと取雀と
細くして食ひけん昔語と今眼前よ見るもうちくさ
や

唐の張巡許遠ち睢陽と守りける時尹子奇よ圍

まれ城中食盡けれとも〳〵めの徑い茶と紙とを食ひけるうそれも盡しうい馬を殺してこれを食ひ盡しうい雀を羅し鼠を堀それも盡しとて巡い愛妾遠ハ奴を殺して食ひそのちい追々城中の婦人を殺してこれを食ふさまとも叛者あるとあしとい〳〵もおのひゆらしてこそ秀吉此体を見て毛利家の輩斯の如き困窮を厭ひ城を守り居るこそまことに優しひきこれ元就よく仁義を以て士民を懐け元春隆景よく父の跡を續て家聲を殞さるる處といふへく經家の節義實に感ぜるまあまうあれとも罪なき士卒百姓等う

餓死をすること不便の至なう扱を入て眼前の苦痛を助くへくとて堀尾茂助吉晴一柳市助直盛を使として城中へ遣ち〳〵吉川式部少輔經家に申けるは七月の始より今日まて百餘日の籠城對陣勝敗ハ取々まて時の運ふしようひと今ふ於て遺恨あるまくい早く城を渡し毛利加勢の面々い帰國あるへく侯城中の士卒雑人一人も別条あく本業と相續いさひへくい但如斯弓箭を取て両陣相争ひしとなれい誰ふてを城の本人一二人自殺あるへくそれ〳〵て多くの人の命を助られひちんと廣大の慈悲と申へくい秀吉ら申入い条々少も相違なく

ゆと申さぜ〜うゐ城中より野田左衛門尉小野太
郎衛門出向ひ禮義正〜〜取あ〜使者の口狀を經
家ゑ告げるゑ經家ゐて〜〜思案〜申けるハ秀吉
の申こさ〜条々道理ゑ中うて覺へハ兵糧ゑつ
よう士卒の氣力衰へりきい敵と打合ふとても果
敢敷事あるべ〜〜ハ鉄炮ゑ打たゝめられ弓ゑ射お
とされんとゝもさをうゑ口惜うるべ〜然らハ徒ゑ
多くのものを餓死ぜ〜めんよう城の本人三四人
自殺〜て士卒の命を助申べさこと當然の正理とお
わえゆ次ゑ經家不肖ゑとも大將の号を免され
身也本國へ引帰さんといなるゑ〜〜〜て某

を一番ゑ腹切へくハ大將さへ相果ゆゝ〜その餘
い詮なゝゆへ〜ゆゑ昔筑前守へ懇ゑ申さるべ〜と
ありけるを以て堀尾一柳立帰り此ゑ〜と披露を
秀吉あれを聞て此方こう和平〜て帰られゆへと
云を聞を却て只一人自殺〜多くの命ゑ代らんを
いふこと義心といひ勇氣といひ感をるゑあまりあ
う然勇士義烈の經家を失らんと本意ゐらハゆゝ外
ゑ一二人自殺あるべ〜ゆと申を〜うとも經家更
に承引をハあ〜ゑ於て筑前守よう廿四日堀尾一
柳を檢使と〜て遣〜けるい經家客殿ゑ出て即
等志妻源兵衛ゑ女錯を申付らるさて心静ゑ腹を

切そい撃と云けるとも源兵衛涙よくれうち損ドけると経家うさぬると云て首とのへ〜時やらく
よ打〜うけう然るよ源兵衛ち〜め近習三人同〜
く自害〜けると野田小野田の両人経家の首を桶
よ入検使よ渡〜〜うそあれと請取秀吉の陣よ持
参〜けるとい江州安土へ送り遣ら〜信長の實検よ
いるとそのち禪寺よ葬り孝養せられ森下中村佐
佐木奈佐塩谷五人の首とい獄門よ掛〜とあり廿
五日筑前守の下知とて藝州ようの兵士をち〜
め雑人等の餓てせられ〜の共よいまつ白粥を
あ〜へ〜漸々よよあるとと養ひとのう心まうせよ出

〜けうあ〜ア〜のちい因州全く平均よ治まりけ
るよ〜〜まつ今年い帰陣〜明年の春よなりて伯
州へ出陣をへ〜と沙汰〜置姫路へ凱陣ゆ〜なりけり
流布本十月廿四日森下出羽入道道與中村對馬守二人い
主の山名を追出〜たる逆罪人るれい許されら〜とそ
自の家よて腹切奈佐日本助い海賊の本人なりその罪
遁をら〜と云て佐々木三郎左衛門塩谷周防守と共
よ九山よ於て自殺をら〜むとの〜よ但この三人い天正九年
二月廿六日元春の家人山縣九左衛門尉春任を大
将よて九山の城よ籠ら〜めのなり又一書よ當國の
住人森下中村佐々木塩治四人い山名家人とら〜て

主の豊國を追出したる八逆人也奈佐日本助ハ海賊
あり此五人ハ輝元扶持して詮なし信長方へも召仕
ふべきにあらざる因之諸人見懲のため首を刎へ経家
事ハ加勢なり撿使あり自殺無用と申遣さるゝ
よ強ちよ大将の名をもちて自害しけるゝ静間
源兵衛あれを打福光小三郎若鶴甚右衛門坂田孫治
郎ハ経家と共よ自殺を経家の首ハ安土へ上を信長
實撿の後禪寺よ送り懇よ葬送と云
又甫庵本よも吉川中村森下相談しけるハ我々
三人〳〵て城中の雑人を助へ〳〵と福光小三郎を
便とし〳〵淺野彌兵衛よ付て筑前守へ申ける

筑前守三人の者をあとをとこれを許ける
然者弥十月廿五日と約束しつつ三人へ酒肴
を請申ふ秀吉これを與ふ
御使札之旨令披露畢其城御両三主以一命可
相代衆命之結構秀吉甚以感彼申ハ即柳十荷
行器十荷肴五種被送入侯御望之儀弥不可有
相違之通御両三人江相心得可被申侯恐惶謹
言

十一月廿三日　淺野弥兵衛尉

福光小三郎殿　参回章

福光樽行器肴を廣間へ居しつハ即三人秀吉へ

降るゆゑに君よりの賜ものとして裝束して書簡を拜し城兵一同へ酒を與へさて廿五日早朝檢使を請城をけうしゐ事憚入ゆ同しくゆ寺へ切腹仕るべくゆとて寺へ檢使を招き三人共ゆ自殺を三人の首を用意をしと見えて箱へ入てけるゆ時吉川ゆ小性坂田孫次郎福光小三郎さし違て死したるゆ五の首を持參をとあり今並へ記して參考ふそるゆ

重修真書太閤記五編卷之廿八終

重修真書太閤記五編卷之廿九

羽柴吉川馬野山對陣の事
并秀吉深慮歸陣の事

吉川駿河守元春鳥取城中困窮の由を聞さらゆ後援をへしとて藝州新庄を立て雲州冨田ゆ着陣し軍勢を集むるといへとも各自國の事ゆ閑暇ゆく折ふし勢少ふうしゆ元春旗本ちうゆ三千五百餘騎ゆて伯州へ打入八橋郡八橋の城ゆ入九月中旬ゆ十月中旬ゆて三十餘日滯留ゆしけるゆ近國の勢追々馳加ちて七千餘騎となるされと

も秀吉の勢よりくへくへい對揚をくきよあらされも
いそくく進發よ及ふに毛利輝元小早川隆景も鳥取
後援とくて元春よカと合をへきため雲州冨田ま
て出陣あるーかとも南方九州の敵と押へん為所
所よ押への兵を殘し備ふとい是ふくく無勢ふして
進されを殊よ隆景い危ふき軍と好まぬい今少し
軍勢を待付てあそ向てめとて動うとに其間よ鳥
取の軍急よして兵粮とふ乏しき由注進櫛の齒を
引う如くふれい元春一人小勢たう共出張をへし
兎角をるうちよ彼城落去をは其詮あるへうんとそ
七千餘騎を率し元春八橋を立て十月廿五日伯州

河村郡馬野山へ陣を替翌廿六日因州大塚へ陣を移さ
んとふしぬる処へ鳥取の城昨日落去吉川經家以
下自殺せし由を告來うしうを元春大よ驚き然い
因州へ打入秀吉と有無の一戰を遂んと勇まれけ
る処へ秀吉伯州へ立越南條兄弟を見續へしとて
出陣ある由聞え先陣既よ羽衣石山よ着とるうと
申けるふうく然らい待居て戰ふへしとて七千餘
騎を一手とふし柴堤つき柵門結京勢遲しと待撰
たう筑前守い斥候と出しふれと伺ふよ吉川元春
七千餘騎馬野山よ備を固め編よ有無の一戰を決
をへしと思定めしふるへく見へいと申けるい秀

吉日と閉ぢこもりて思惟しておのひ出をしてとそ
あれ昔楠正成小勢を以て隅田高橋を破り大ゆ勝
利を得しかとも宇都宮公綱小勢にて馳向ふと聞
くや正成天王寺を引退さしとうやらを正成の英
智人ゆ勝をし処なり是と以ておのへを吉川ゆ勢
思切て一人を生てうへらしと踏止りい宇都宮
か小勢ゆ比へ向べし我楠となりてそんやく引取へ
し譬へ十死一生と決定せし軍兵七千へ我手ゆて
勝わとうべる兵士七万ゆ向ひいしし然るゆ此方
てうりうゆ四万余なり凡三万余人も不定せりその
上ゆ此方ゆて吉川ゆそそ打出んとい思寄ゆ敵

を此方を目ゆうけく無二の一戰と思ひ設し也さ
をい主客の兵機大ゆ相違せし無益の軍して士卒
と失ふんと良將の好まる処なりとて既ゆ凱陣
の用意ふうをとける處へ蜂須賀小六家政とて
出て申けるへ御歸陣の御諚誠ゆ十全の御計策感
し入て候但吉川元春御凱陣の後鳥取丸山を落さ
をし怒をこの羽衣石の城ゆうつし南條兄弟を攻
申へくその時加勢ゆあさをひてく城忽ゆ落い色
し然らんゆを此後味方へ降參仕いのあるへう
ゆ因て御引取の節羽衣石岩倉南城へ兵粮を入
むふへく加勢ゆを某ゆとゆても殘さをゆへき

めと申ひきい父の彦右衛門正勝大ゑ叱て申ける
い若輩ののゝ分とゝて推参至極の申條うふや
てゝひきい浅野殿ゝゝめ諸歴々多くゝゝゑ居玉
へゝ其方の異見ゑ及ふへけんや謹て居へゝと制
しけると秀吉聞あひ彦右衛門左様ゑ云とゝうと
小六うや処ゝとふ理ゑ當とう我等もとくゝう此
事と案ゝ居たゝ早々小六う申ゑ任て兵粮を入へ
ゝされとも兵粮ゝうう入んとせゝ毛利付城の輩
又い吉川う兵士やゝゝ不知顔ゑ見てゝあるゝ
き也必定打出られを妨けんとあゝ成へゝ因て兵
粮を入るとい深く隠ゝ我勝軍ゝゝる競と以て吉

川う陣ゑ何て一戦をる由を披露とへゝ然をゝ吉
川も南條小鴨う城ゑ向ふとをい捨置て我勢ゑ向
ふと大事とをへゝ其時我勢もゝゝ吉川ゑ向ゑ様
ゑ備を立へゝ然ゝて羽衣石の山續をゝる高山
へ引上う本陣とゝゝ吉川陣を眼下ゑ直視ゝ五色
の吹貫を山風ゑ吹ゝひうを雲伯の諸勢を一呑ゑ
をへゝ氣色を顯くゝゝとゝ下知なをいめゝて調練
ゝたる武士ゝゝ何とも左右へ引分をたう吉川方
あそゝくと見付勇猛無雙と音ゑ聞えゝ羽柴う勢
山上ゝゝ打下ゝて切掛らい味方の兵士一支も支
得を敗軍をへゝ抑この馬野山左い湖水漫々とゝ

て洪濤天を浸し右は磐巖岩崎として樵蘇も脚を
絶たゝ後は橋津川曲流して香象もたやすく渡り
めさるゝたゝ一條の橋をわたり爰にて一戰あ
らんとゝのゝをはらに湖水へそゝらるゝ大河の浪
に溺るゝか二川の間を出へうらとおのゝひゝる
よや陣々大に騒動をして大將元春をこゝも動せ
ば筑前守と無二の軍をんとは雲州を出しゝ
初て思定めし處あゝそこの上に爰に陣を取しは地
の利に付て味方のゝめてに第一の地形あゝそれ
のゝあゝは時は十月下旬晝は味方弧にあゝ夜
は虚にあゝる筑前守はゝめゝて軍をあゝに

宜しゝゝと知たるあゝん但無分別の猪武者ゝ
寄來るまゝをあもあゝは寄來は湖水に切てめこ
ふ殺しゝふをへし然ととも両虎二龍の軍ゝ我等
必死とおのふへし敵は諸國の軍に切勝て當時日
の出の羽柴筑前守我々敵に不足ふしゝふ軍
をおもしとおのふ臆病者は今のうちとや逃ふか
し元春更におれを怨ゝ伊て軍の用意をゝとて
陣々の前に隍ゝを芝土手つき柵を二重に結を
突て出へゝ門二箇所あけ敵の來らん道筋に折を
もつめる白雪をよゝ掃ゝを明るおそしゝと待ゝけ
その上後ゝる橋津の川の渡橋を切て落し繋ゝ

船をい焼ちて一重ゑ打死の覺悟也秀吉斥候を
出し元春ゑ専合戰の用意をるゝと聞をゝ中
國弟一の智者と聞吉川駿河守ゑおそゝも秀吉ゑ
をゝらをたるい卒波兵粮を入へき時節ゑゝとて
一万餘人ゑ兵粮一二斗りゝ負を峯通りを小鴨左
衛門尉元清ゑ籠ゑゝ岩倉の城と南条伯耆守元續
ゑ羽衣石の城へ入さうけう毛利家付城のゝゝか
ゑていい兵粮を妨けんとその支度ゑゝたうゝゑと
も秀吉元春の陣へ切掛らんとをゝける勢ゑをゝ
られて皆其方ゑ向備こうゝゑい夜いふゝゝ暗さ
いゝらゝ油断ゝて入課させけるゑをゝをゝけれ

吉川方ゑていい敵山上ゑゑ下る勢定めて彈丸の轉
をるゝとゝなるへゝとゑゝひ今雪限ゑの命なゑゑ
ゑ心安く眠るへゝとゑゝ弓ゑ矢をゝけ鉄炮ゑ玉こめ
馬ゑ鞍置鎧の上帯をゝゝめ忍の緒をゝめゝまさ
切を今やゝと待ゑゝ夜いそのゝと明をゝる敵
陣の上の群烏ゑゑゝとゝを聞えけを羽柴勢ゑを
ゑゝをて吉川勢い敵の引退ゝを夢ゑもゝゝひ張
りめゝ弓弦もそれゝをのゝゝ握る拳も緩まれ
いゝゝゝい両城へゑゑのひのゝゝゑ兵粮を納さをゝ
ことの妬をゝゝを怒ゑのゝゝる甲斐もなゝ斯て羽
柴吉川両勢對陣をるを五日ゑれ共秀吉吉川勢の必

死の氣を察し、ひきい死武者ゑ駈向ふく過をゑ何を遠うゝ味方ゑあゝて軍させんの共ゑうと制しけるといへ何さま大器量の大将うゑ意の外の心入やと聞者感ゑ堪さうけう吉川勢い小勢ゑう大敵い山上ゑ因て陣を張たれい容易く打てうゝらをもせゝ泛々と見合せ居さうけるうちゑ山上ゑう峯傳ゑ引退けるといい山下ゑてるあれを知さうけるも斷なう羽柴の兵士い眼ゑ見けさうけるい緩をとも來春うゝゝ雲伯まても亂入をんとゝゝ氣力と増たうけう扨ゑゝ羽衣石岩倉へ加勢と殘ゝ置とんゑ蜂須賀小六家政ゑうゝへゝと

て家政と呼出ゝいうゑ小六あゝゑ殘るへゝやたゝうゑ申をとあうけるゑ家政うゝこまう勇士の面目とれゑ過ぐ命をひさう守るへゝひと申けるふうう組下の士彼是五六人を相添兵士三千餘人を從へゝ羽衣石岩倉の両城ゑとめ置たう十一月朔日吉川元春惣勢と卒し馬野山を引拂ひ雲州さゝて帰陣せう

此時戸摩里城ゑ河口刑部少輔久氏百五十騎斗松ヶ崎城ゑゝ小森木ユ允宇津吹條山の城々みゑ元春方ゑて籠城をう浮田直家其子秀家と秀吉ゑ詫とる事

并羽柴筑前守淡州退治の事

羽柴筑前守秀吉伯州を引拂ひ播州へ帰らんとする處に備前の浮田直家重病を引受存命不定なる由を告來りしかば直家に備前へ立越岡山の城に入直家の病を問へさ為うつゝ八郎を見參に入申へきとて入城あり〳〵由を申さるゝ直家其懇志を悦ひ苦悩を堪へて病牀へ請〳〵因州長々の在陣容易あらさる心勞たるへく一國平均両城没落さそ〳〵満足たるへさ旨を賀〳〵その〳〵我身あるる病に〳〵あらさる存命旦夕に逼るとう家督の事養子與太郎基家蜂濱に戦死〳〵實子八郎いまさ九歳幼稚

にて備前義作の兵馬を進退とることあること〳〵と明ても暮ても心障りあるか如斯たる〳〵のよう〳〵にそうたて〳〵何の猛さともあ〳〵筑前守は智謀とゆひ勇武とゆひ世に良將あるとゆひるされあひ〳〵あるに幼稚の八郎に事たのこ奉うた〳〵とこの日頃念を〳〵に計らひ來臨ある条實に以て生前の大幸何事にかとに過ん態と見參に入て頼奉るへさ子息の上なれとも折に〳〵ゆ〳〵たる鬼もゆ〳〵も憐愍を加へ人とあ〳〵へその上まて弓箭取そへとも士卒を引廻ことも教立あるへくに然らに直家草葉のうらに悦ふのこあらひ亡父興家

亡祖能家さて又遠祖代々備後三郎高徳の霊魂までも君が恩頼といふんと涙を流して頼こしかば秀吉も直家の心中を察し給ひ父子恩愛の切なるに人を感動せしむる天然の本性なればそゞろに哀を催ふしけり八郎ハ先年より秀吉の許に人質として有けるが今度も同道をしたれバ秀吉直家に向ひ病のことハ是非もなし敵の寄しなバ何百万騎をも物の負となもてさならぬ泉州なれども大様に弱らをみひては云甲斐なし八郎ハ秀吉が傍にありてよく某が弓箭を見覚えたれバさまでのことハあるまじけれども備前美作ハおろか此日

本にハちと過分の大将となるべしすべて心にかけおよへかしと申させ給へバ直家おのめさ枕を上八郎を側近く呼居筑前殿この度の懇志にの法の武士の及ぶ処ならぬことハ兼て思ひ知なから取別嬉しくなそあれな筑前殿の意に違ふことなくよく筑前殿の弓箭を見習ひ父が跡とて備前美作と知ことあられ國中の武士とよく養ひ我名を揚る迄ハかくとも先祖の名を降さるなと教訓し又筑前守に向ひ幼稚のものなから人質として参らせ置し八郎を如斯のてにやしなひ筑州のかたハらに押居て並えしハやがて筑州の子息

かと思ひれい人柄も多くの侍を引廻しまふを見覺えつる故よや一際打上うて見えい但八郎いまた元服をば同じくいい直家う生てい内よ男よあ
て賜ひてういくやと望申けるあふ秀吉もう移く其用意あったうけるよふう直よ髻とう揚て烏帽子ゑぜ浮田八郎秀家と名乗をうあふく似合たう筑州を真の父とおもふへ申ける体と見つとい今てやあめひ置とあ病中何の設もあくひと寂々けとともせめて一二日軍勢の脚を休めいてやと申ける岡山よ一日逗留あって姫路へ帰陣あふよ斯て直家い明る年正月十四

日終よむあふ然るよ吉川勢本國へ引返けとい蜂須賀小六も播州へ引返ける処へ安土よう上使来う因州の軍功を賞とらとうい淡路國を平治あとへさ由を仰出され池田勝九郎之助と検使として差下されけるよう十一月十五日二万餘騎よて淡州へ押わう使者を諸城へ遣て降參とへさや否を問尋ふむ抑此國三好一族の領國よて安宅十河等居住をう淡路常盤草よ十人衆といふい洲本の安宅殿安呼の監物殿湊の次郎殿炬口の炬口殿由良の由良殿これいこふ安宅同氏あう山田の嶋殿沼嶋

の梶原殿郡家の田村殿志知の野口殿阿那賀の武田殿合せて十家なり又此外に七人衆といふハ加茂主殿助柳澤越前守加集木工允真嶋彦太郎白川刑部小田庄家なり
秀吉三好山城守康長入道笑岩を案内者として國人等を招きけるに元來笑岩ハ三好一族の内にても嫡流と不快にして親しからねバ永禄の大亂にも一味せざりし兼て秀吉の智勇兼備をしりて悦ひ秀吉の甥を養子となし三好孫七郎秀次と云
秀次ハ筑前守の姉聟長尾彌助吉房の長男なり長尾弥助又ハ中村彌助といひ又木下弥助昌幸といふともあり弥助また三好武藏守とも云と流布本にミゆ
かゝる親ミあれバ笑岩まつ先にたちて國中を誘引しけるに由良の城主安宅河内守さるよし帰伏せず防戦の用意なしける由を聞て秀吉池田勝九郎之助を以てこれを攻させけるに河内守終に叶はず降參して淡路一國平均なしけれバ降人ともを池田にあづけ安土へ登らせ十二月二日秀吉ハ播州へ帰り同月下旬歳暮の御禮として安土へ參上ありしかバ鳥取丸山より馬野山の對陣淡州征伐の褒賞行なはれ西ハ秀吉を上客として信長手前の

茶事あり筑前守面目身よりあまりて帰國し明年い
毛利退治として信長出馬あるべき由と仰出されし
秀吉い姫路へうえうけい
甫庵本十二月廿日秀吉姫路を立て廿二日安土
へ來うしういその夜信長秀吉の旅宿へ至り廿
三日登城進物あひたくしき由と注進と并と見
るへし

重修真書太閤記五編卷之廿九終

重修真書太閤記五編卷之三拾

於次丸秀勝初陣の事
并信長勝頼退治手配の事

天正十年正月羽柴筑前守秀吉播州姫路よ在城て
國中諸士及ひ即從等悉く登城し新年の賀儀を述
るを請られたり去年六月因幡國よ發向し十月迫よ
彼國一圓よ平均し十月上旬帰國あり処淡州征
伐のことと安土へ下知あるよりよ秀吉長陣
の疲労とも労とをひ即日淡州よ趣き不日國中を
平治し降人と安土へ進上し直よ歳暮の禮とて

參上し駿數獻上物ゑ織田殿ゑ〜め諸侍の目を驚
のをけるうへ毛利退治先鋒手配のゝめ姫路ゑ帰
う年頭の出仕ゑ及てことと仰らるゝ筑前守ゑ
暖氣の時節と待織田殿の下向を迎え奉るへきた
め播州路と作らを掃除念と入へき旨ゆ〜〜申渡
しその身い居城ゑあうて長閑き春を迎へ國人諸
侍と集め酒宴と催ふ〜去年処々ゑその軍務格別
勲勞と賞しゆをといい一日の安佚ゑ百年の齢と延し
心地して衆人あと〜〜と秀吉の深旨と武威仁恵ゑ
帰伏しいゑく粉骨の忠を抽んをへ〜とおのゝふゑ
う信長の出馬ゑてい程遠〜あゝら春の日を空〜

く過さんと冥加おそろ〜然者近日のうち備前ゑ
出張し兒嶋ゑ殘る毛利勢を攻おとゝそれゑう
進んて備中備後と切取織田殿の御待まうけゑふ
さそやと頻うゑ勧めけるゆへ筑前守もその勇義
と壮ゆうと悦ひ左あらい於次丸こと〜具足をき
せそめし祝ゑ大将と〜て出陣をゝむへ〜とおう
筑前守いとてゑ四十をゆえて子といふかのゝ無
う寂しきゑ織田殿の四男於次丸と秀吉の子ゑせ
ゑとて去年ゆう此姫路ゑ下向あうし也今年元服
して羽柴小将秀勝といふ秀吉へ織田家ゑて新參
の士といひとゑ畢殘の勤ゆう段々勲功を以て墨

股の城主とゐ〻長濱より移り小谷廿万餘石と并領中國探題として播州と平均より治め因幡伯耆を切鎮め備前義作と威服をゝめゝと他より比類ゐゝ因て織田殿も昔の藤吉郎よりあゝゐ数國と領せゝ大名ゐゝ天下無雙の男と仰らるゝふて柴田丹羽の上より立織田家隨一の功臣として中國九州まても打平けゝと許されゝこと凡人ゐゝぬ神智のいさゐ処と知るへゝ爰より於次丸の秀勝一万五千餘騎より て備前へ發向ゐゝけるより當國よてい宇喜多和泉守直家去年ゐゝ重病ゐゝけるゝ正月十四日終より むゐゝ成行年五十四歳ゐまゝ惜うるへき齢ゐ

う秀吉岡山より入てその遺跡のこと去年直家の一向より頼ゝとゐれい八郎秀家の僅より十歳ゐうけるを家督とゐゝ直家の弟浮田七郎兵衛忠勝家老戸川肥後守岡越前守長船紀伊守花房志摩守同助兵衛等より幼主と補佐ゝ二國を治むへき由とおゝて らるゝ今度當國へ發向い秀勝具足をゝめの祝より兒嶋の毛利勢を追拂ゐん迫の結構ゐるい浮田家出勢より及ゝいつまも籠居ゝ直家の中陰を修をらるへゝとて八郎秀家とい岡山より殘ゝ止められけう

直家の妾某氏八郎秀家をゝひ女子一人をうむ

然るに和泉守卒して後此妾筑前守に仕ふ是を以て秀家兄弟筑前守の愛顧を全くし秀家い備前美作と安堵し女子い毛利宰相秀元の室家たらしむ蓋失行の人たり其利を知て其義を知を漫に義朝の妾常盤の再醮して三兒を活をしを法とし英雄さあるとに媚せらるて知を豈あ〜

兒嶋の麥飯山に小早川隆景に植木出雲守福井孫六左衛門両人に八百餘騎をさしそへ差置けるに秀吉秀勝一万五千餘騎をもて迎も掛合の軍のあるべきよあらんとおもへ

も又一戰に及て城を明退んとい後艱とおもう〜傍輩の嘲もうるさく叶てぬ迫も一箭射て尋常に振舞やと諸卒を下知し植木福井真先に立て防戰を秀吉い秀勝を伴ひ小高き岡に取上り軍をとけ〜勇めんにいのくそれと短兵急に立〜攻させけるに城い小城にて堀堀とて浅間なり戍る勢いそうに八百餘騎寄手一万五千餘騎に比べい物の負にもあらいとて城中まとに堪えうべきやひけん植木福井今い是まてそと八百餘騎を直丸にそなへ城戸を開て打て出雲霞の如く渦巻て扣えさる寄手一万五千餘騎の中

へ面もふられ切て入蜘手結果十文字ゑ馳走う當
ると幸突立切立のをけをい目ゑあるる寄手あれ
とも左右へぐつと打開き中を明くそ通しけるさ
をとも羽柴う勢い大勢あう又取てうへ〜取巻し
ゆる毛利勢ものうれぬ處と思ひ切今日を限うと
戦ふわとる城兵八百餘騎大形討をて散々ふこそ
あうふたを植木福井いうふ〜てうい遁をろん敵
の中を切ぬけ藝州へ逃帰しと也秀吉大ゑ悦ひ諸
勢と下知して麥飯山へ馳上り毛利家まて取立た
うける砦と焼捨ていをとも毛利方ふう支ふる者
なををい秀勝初陣の高名とて勝関三度あけそ

をとう姫路へ凱陣ふ〜織田殿出馬の時日を窺ひ
その上まて備中備後へ出馬せんとまつ岡山まて
引取その用意取々ふうける処へ上方の飛脚到來
を何とやらんと云い織田殿ゑい今春信州の木曽
左馬頭義昌御味方とふるふう甲州の武田勝頼
と打滅わさくゆとて二月上旬甲州へ進發ふ〜ふ

木曽左馬頭義昌い旭将軍義仲十八代義康の長
男ゑして武田信玄の壻ふう天正十年二月九日
義昌勝頼ゑ叛し信長ゑ降る因て信長甲州へ打
入んとと企て信忠を先鋒将とを十二日信忠岐

阜を發し

然るに濃州信州の武田持の城々悉く明渡し其の勢破竹の如く遠州濱松にも加勢あれい武田の滅亡遠うらひ秀吉より軍馬を調練しあるへし甲州静謐の後直に中國へ出馬あるへしとの下知あり秀吉られと承り弥中國進發延引たるへしとおのひ〳〵いまつ岡山に姫路へ引返しける織田殿年來の敵たる武田家と打亡さへさため甲州へ出陣あるに由然るに某居城に安閑とあるへさにあらひ御陣見廻のゝめ且い於次丸の元服して鎧著たり武者ふり并に初陣して一戦に

勝利を得たり〳〵趣と言上をとりやとて姫路に淺野彌兵衛小寺官兵衛その外歴々あり〳〵殘し置加藤虎之助清正福島市松正則等をとゝめ馬廻り衆三百餘騎にて三月十一日播州を發足し

勝頼新府中を出て田野の奥天目山に入り日也信長い去五日安土を發足し六日呂久の渡に著をとゝれ七日岐阜に逗留八日岐阜を發し十三日信州伊奈郡祢羽根に著し十四日飯田に著ふと云い岐阜にあり祢羽根にて凡廿三里許山道嶮也大軍の行路一日五里許と知へし

木曽の降參い濃州恵奈郡苗木の遠山久兵衛尉友

政う取次あり織田殿大ふ悦喜まし〳〵木曾の路開るんよりゝ甲州へ攻入んとたやをとるべし〳〵去い早々打立へ〳〵として手配を定めらる駿河口ういい北条氏政父子遠州ふうい濱松の御勢飛驒口ふう金森五郎八木曾口い信忠伊奈口い織田殿ふう二月十二日信忠ふ從ふ人々い瀧川左近將監川尻與兵衛尉毛利河内守水野監物同總兵衛尉森勝藏團平八郎以下五万餘騎とゝ聞え〳〵

信長の勢い七万餘騎菅谷九右衛門尉野々村三十郎福嶋平左衛門尉下石彦右衛門尉等相從ふと云明智光秀諏訪寺まて如此目出度事も年來

骨折たる故と云い信長光秀を欄干へ押付とふて骨折たと被仰て擲うとふ〳〵是明智う叛そる根本あると云

勝頼木曾う逆心と聞て自向とて叶ふまじとて二月二日二万餘騎を率し甲州新府中を進發ありて信州上の原ふ着陣の処上方勢追々發向の由注進あるふうう防戦の手分をあ〳〵たりけるまつ伊奈郡高遠城ふ勝頼の弟仁科五郎晴清を大將とゝして小山田備中守渡邊金大夫と籠らと大嶋の城ふゝ日向大和入道宗英小原丹後守依田能登守安中七郎を籠深志の城ふい馬場民部丞多田治部右衛門尉

横田甚五郎とゝめ駿河口鞠子の城ゟ室賀兵部丞持船の城ゟ朝比奈駿河守屋代左衛門尉關五兵衛尉田中城ゟ芦田下野守と籠らるその外の城々ゟも相應ゟ人数を加えてあれを守らる然共勝頼武勇ゟして人の諫を用ひと佞人を愛し忠臣を遠さけさるにゝゝ累代の老臣多く長篠の軍ゟ強死し打殘されし將士こゝか勝頼をうらむるもの多くしてこれゝ爲ゟ粉骨を盡さんとおもゝゝのゟ上方濱松の旗の手とゝるゟ否城を開て退散しあるゟ兇を脱て降を乞わとゝゟ信州の内ゟて漸高遠ゝゝゝ甲州方とてゝ殘うけゝ勝頼もゝゝて

ゝ如何とおもゝゟ処ゟ穴山入道梅雪遠州へ降參し たゝしゝゝ勝頼甲府へ引返ゝ出陣の時二万餘と聞えしも今ハ僅ゟ三千餘騎ゟ足さゝけゝ松尾の小笠原掃部大夫信嶺織田方へ降參し信忠の案内者として二月廿九日高遠城ゟ押寄けるゟ城主仁科五郎晴清ハ信玄の愛子ゟして武勇勝きし良將ゟれハ味方の城々の落る様ゝこしも意ゟ介まゝ信忠の大軍を引負散々ゟ戰ひ討死ゝ行年廿六歳とゝや高遠落去のゝゝち筑摩伊奈の郡一圓ゟ織田方とゟうにけゝり

晴清の首曲物ゟ入三月六日濃州呂久の渡ゝゟ

至りて信長の實檢ふ入信長おきを岐阜の長柄河原ふ梟をと云

勝頼軍評定の事

并真田昌幸忠諫の事

高遠落城して仁科五郎をとゝめ武田の勇士等數多討死をゝゝ信忠より〳〵勝よのう直よ進んて甲州へ寄あふ三月朔日駿州江尾城をい穴山陸奥守入道梅雪戍うけるゆ濱松の御方へ降參しけるよ
るう持船田中鞠子の城々何も聞怖よ落たゝゝら梅雪入道と案内者とゝて甲州市川口へゝをふ勝頼この由と聞て甲府へ引返しけるよ三月三

日高遠の城落て仁科殿主從去廿九日討死あゝゝと告來〳〵ゝい味方よ取て股肱と頼ゝゝ仁科殿討とゆひてたとゝゝ人力を落しけるよ遠州勢上方勢追々責近つゝ由諸方ゝう注進あゝゝゝい只今まて三千餘と聞えゝも次弟落て今い漸一千餘騎よも足さゝうけう然るよ武田太郎信勝生年十六歳なとゝも智勇兼備の若大將あれい進て出て普代重恩の侍い多〳〵討死して義名と揚臆病未練の者ともい逃失て露命を貪るその上廿餘代相傳の地下人さへ疎む様よあゝいゝるい我國あゝゝ敵國も同前と云〳〵然らい武田の家の滅亡をへゝ時節到

來きう誰う昔ふう長久の家あるべき人とも身を怨むべきよあらじ織田勢を引受いさぎ能討死を〳〵神速最期の御用意あうて然るべきと勧めけれい長坂釣閑齋跡部大炊助をの〳〵命おしさふ死い安く生い難〳〵大将さる御身い万死を遁れて一生と得とも申會稽の恥を雪むるとも申にあうそや何れかも一旦何方へあうとも御立退あうて時の至るを待とあふこそ然るべけれと申けるにうう勝頼両条いつれとも定めうゑ猶預ふ〳〵けると見て真田安房守昌幸進こいて〳〵御曹子の仰られい処い勇士の本意あてうけもて〳〵聞え

い又長坂跡部の申さるゝ邉もとてやく〳〵覺えい左ゆく上州吾妻の郡岩櫛い要害堅固ふ〳〵て四方一条の路を開く然もてうう上一人立の廣さあて下い數十丈の谷川底ふう〳〵上い屏風を立たるとき石壁青苔ふう〳〵うふう實ふ天然の嶮岨さうふ人の造作を經ける地と申へくいその上味方の城城小室岩尾上田をそ〳〵め松枝安中箕輪ふと取まいてふれを助〳〵兎角〳〵て年を經いうちふ累代の支族重恩の郎從をい〳〵ふ馳集う可申矢玉藥丈夫ふ貯へ防戦三四年ふも及ひいうちふちふと織田家ふも違變の出來さるべく然らい御関運

の期いまをうと申へ〜の〜又弥御運つきゆく
その時ゆゑを御自害あるへきい尼子う冨田の籠
城七ヶ年別所う三木の籠城も五ヶ年ゆ及ひい甲
信駿上四ヶ國を領〜ゆ〜武田の御家あう百日も
怠へゆゑ四州と〜〜攻取をさせゆくんと餘う
ゆ残念と申へ〜〜穴山入道の如きい御一門の中ゆ
ても格別の高家と申殊ゆを御後見あるゆそれう
勧め奉うて累世の居城をうゆうゆ〜さて新府
中の普請いまゆ調てゆいい不要害の地敵を受ゆて
んと御計策の善とい申へ〜〜急き上州へ御開
き可然と申けるゆうう勝頼此義ゆ同〜上州へ趣

くへ〜と有所ゆ當國郡内の小山田左兵衛佐信茂
ゆ初て〜織田家へ降参をんと約束あ〜ける故
此度一忠節のゆめ勝頼父子を郡内へ退去をゆめ
路次ゆて〜と討んと思ひ〜とあれい安房守の
申さゆ〜吾妻要害堅固ゆいいゆへとも分内狹〜
て大儀の計畧あ〜ゆ〜御領分とい申をと
も武田殿い命ゆ〜さゆ他國へ出奔あされ〜あと
いゆをんと弓箭のゆゆへ〜某う任い鶴の
郡い四方ゆ山高〜〜て中ひろ〜〜兵粮玉薬ゆ〜十
分ゆい大敵と弓受て幾年籠城あ〜ゆとも事闕
いゆ〜郡内へ御動座可然と勧め奉うけるゆ安房

守聞もあへと小山田の居城へ御移りあるべくいへ
只此處にてともかくもあせをあへさるにそ
の故い當國の地下人ともそそよ御敵の色とあ
ひへ共鶴の郡とても頼りにらに四方よ嶮岨あ
ともも山道坦らにて五人十人あるひて進
らいへ古府中を棄ておふて新府へ移らをあふも
便利と要害よるをあふふてひたをや然らい他
國とても御領知の上州へ趣うをあふを誰うをさ
みへ申へさ故殿の人い城人い石垣人い國人ともそ
城と城とをあをと仰られにらにてひあり
當國の人うへの如く御政道を怨こ織田家の賄賂

みふけう義理を忘ていふ城とたのこ石垣とあやへめ
さるへき國人御敵とあるひよてたとへい石垣崩を城
破をいと申へ如斯あれい國にて御合戦御勝利あ
るへうにいつをとも上州へ御立退ありて連々よ崩をい
石垣破い城とも御修復あるべくいたんう旧恩の地下
人あるへ只今欲るうをを心をひるあへ申まうにて
もいこにと勧めけるるへうに然いそうめの如く吾
妻へ立退をるへへと勝頼得心あるけをい信勝も尤
然るへと同意ありけるるふうに真田い用意のあるへつ信
州へ馳帰けう真田出立のち小山田左兵衛るにも不興
氣にて御運の末よるををうへうに御思案も闇成い

ゆのらる累代の某と御うとくゝゆゑ近頃伺公の真田を頼まゝ
みふとのうさてさゝふとその上ゝ吾妻迫ハ路次遠く隔うて嶮〳〵ゆへ
女中の御越あらんと尤難義に〳〵と申て歎さけると長坂釣閑齋
くさて〳〵ゝう小山田ゝ申処至極の上策と存ハ一ゝつ郡内へ御関さのち
吾妻へ御越いても不遅と存ハ其上安房守の胸中とそもゝ打まうせ
て頼ゼゐふへくさゝあゝゝ申けゝと勝頼又郡内へ落さゼあふへ〳〵と信茂
ゐ下知あうけゝと信茂喜ひ然ハ御道の掃除申付ハ〳〵そ小山田ゝつ郡
内へ立帰る

勝頼新府落の一条諸説さゞ〳〵ふ〳〵て一定あ〳〵ひ然共真田と小山田の論尤
人の知処あれハ流布本ゝゝ及ふのゝ信州落御獄落の評定あゝ〳〵由もゝと今其実詳ゼ

重修真書太閤記五編巻之三拾 終

江戸書林

須原屋茂兵衛
山城屋佐兵衛
小林新兵衛
岡田屋嘉七
英大助
英文蔵
出雲寺萬次郎
和泉屋金右衛門
須原屋伊八
外神田旅籠町壹丁目
紙屋徳八
日本橋西川岸町
亀田屋甚藏